博物館藏版

教草 第十九

蠟一覧

凡そ日用に供する衣食の如き人皆之を衣し之を食して何ものたるを知らさるところ其物品を改正良善にするの術に暗く従て新規の發明なく國產を繁殖せしむる各其業に就く事を知らず故に父兄たる者其子弟をして幼時より各業の大畧を知らしむるときは他日脩產の基となるべし嚮に明治六年澳國博覧會出品の際に集し各種職業の教草を編成せしめ畫圖を加へ以て童蒙に便せり然に舊版第一より第廿四まで昨八年七月の火災に罹りしにより今之を再刻し兼て従前の謬誤を正し遺漏を補はしむと雖も其圖の舊版を再刻せる者の如きは鮮明ならざるあり看者之を恕せよ且我國產の多き此一部の盡す所に非ず此餘の如き以て他日に讓る

明治九年二月　田中芳男記

第一 稲米 第二 糖製 第三 養蚕 第四 生糸 第五 樟虫
第六 野蚕 第七 葛布 第八 苧麻 第九 草綿 第十 織緯草木
第十一 索麪 第十二 葛粉 第十三 藍 第十四 青花紙 第十五 製茶
第十六 烟草 第十七 漆 第十八 蒔繪 第十九 蠟 第廿 白柳
第廿一 疊表 第廿二 香蕈 第廿三 製紙 第廿四 蜂蜜 第廿五 油
第廿六 臙脂 第廿七 澱粉上 第廿八 澱粉下 第廿九 褐腐 第卅 豆腐

教草 第十九 蠟一覧

版權所有

蠟ハ日用必需の品にして通常樹實ハより製し亦蜂窠蟲巣よりも製す西洋にてハ獸脂鯨油より製して樹實よりハ採らず蠟の用ハ專ら蠟燭に造り諸品の模型を製し其他尚各種の用をなせども今茲に其概畧を述ぶ

蠟を採る樹ハ漆樹ヤマウルシハゼウルシ[一名ロウノキ世俗黃櫨の字を用ゆ]天竺桂等の實より採るなり

漆蠟ハ漆樹及ヤマウルシの雌木に所結の種子の外肉より採る凡て蠟を製する土地にてハ漆樹の雌木と是れ漆液を採ることなく數年其樹を伐らざる故巨大の樹高さ六七間に至るものあるも亦漆液を專らに採る土地にてハ七八年目或ハ十年目位にハ伐木するゆゑ大樹となる事なし

漆樹より採るものハ十月中落葉の頃に至り樹上の熟實を上及の鎌[第一圖]を長き棹に附け是にて突落し家に持帰り粉の他へ散らざる為に紙帳の内にて臼にて搗き箕にて粉と核とを篩ひ分け此粉を製して蠟とするなり其搾り方ハ諸國にて違ひあれども皆大同小異なるも今東國會津仙臺辺にて製する法を挙て其大旨を示す

鍊釜の中に湯を沸騰せしめ其上に木材をわたし其上に篩を敷き搗たる粉を撒布して蒸し又之を麻袋[第二圖]に入て再び蒸し第三圖甲へ入れ木楔[第四圖]を第三圖甲の両側に入れ又圓頭の木楔[第五圖]を第三圖乙へ入れ圓頭木楔の頂を木槌[第六圖]を以て撃て搾るなり其搾り出したる蠟ハ第三圖の内へ滴り落るなり此搾木ハ欅の材を用ひ圓頭木楔と木槌とハ柘の材を用ゆ是撃力強き故に他の材にて忽に損すれハなり

蠟を早く搾り出さん為に蠟の全量凡十分一許荏油を入る此油を多く入るれバ蠟の品位よろしからず二番搾りも亦之を鍊釜に入て前の如く蒸し搾る事亦同じ此二番搾りの時或ハ荏油を入るゝ法もあるなり

ヤマウルシの實より採るものハ夏の土用後八日目より採る又廿二日目より採る土地もありヤマウルシハ大樹なきゆゑ實を採るに器械を用ひず手にて扱ぎとるなりヤマウルシの實ハ臼にて搗き粒の侭にて前法の如く蒸して搾るなり

蠟を晒す法ハ鍋にて溶し大なる桶へ冷水を汲置其上に下辺の隅に孔を穿ちたる箱を置て溶したる蠟を其箱に入るれバ蠟ハ下辺の孔より漏りて桶内冷水中に流るゝを手にて強く揉むなり此樣にしたる蠟を篩亦ハ扁き箱に入て十五日程の間日光に曝乾すべきなり

ハゼウルシハ專ら西國にて植付け蠟に製す此樹琉球より薩摩島へ始て渡り是より追々繁殖して今七種あり丸實安富猪の爪小川田中吹上松山等なり就中松山といふ種を上品とす

ハゼウルシを仕立る法ハ實生より木等あれども砧木を仕立て接木をる法第一なり其植付方接方等大藏永常の著す所の農家益に詳に載す蠟を搾る法ハ漆蠟を搾る法と格別異なることなし是等も農家益に詳に載たる餘紙なき故前書に讓る此に載せず

コガ蠟ハ天竺桂の實より製す此樹ハ漆樹ハゼウルシ等に異りて落葉せざる故に田畑の陰となるを厭ひて植る者少し長門北海岸大津郡に多く産す中夏に開花して晩秋に實熟す實をとりて水に浸す事凡四五日の後草鞋をはきて之を踏み蹂るときハ上皮忽ちに脱す之を風乾して後搾る蠟を採る其法漆蠟に同じコガ蠟ハ油氣多き故蠟燭に造りて暖氣の時節用ひ難く唯冬時のみ用ゆべし然れども其火光ハ甚明るし若油氣を減する術を發明しなば他の蠟よりも廉價なる故日用に利益あるべし

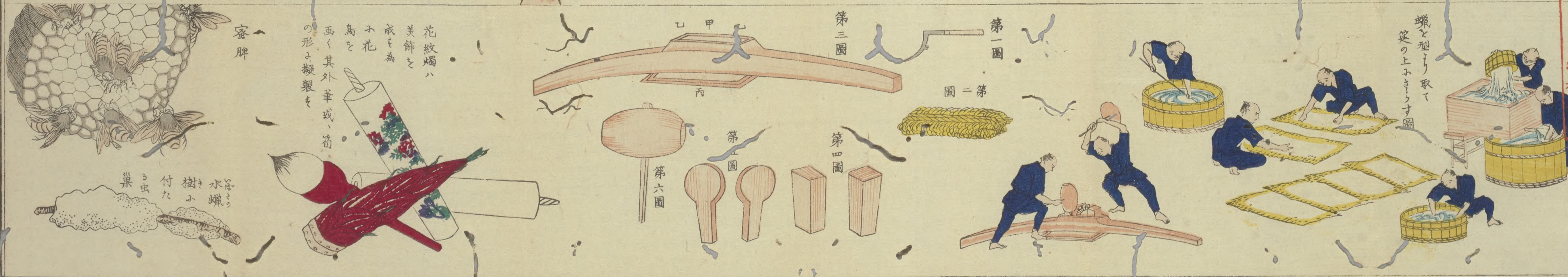
總じて蠟を搾りたる滓屑ハ田畑の糞培に用ゆべし

蜂窠より蠟を採る法ハ蜜蜂の窠を蜜をとりたる剩餘の蜜脾を熱湯の内へ入れて煮れバ忽ちに溶解して油の如きもの浮ぶ是即蠟なれ共細かき銅網の皿樣なるものを鍋の中へ入て杓子を以て壓すときハ蠟のみ網の上面に漏れ浮び蜜脾の滓屑ハ銅網の外面に殘る此銅網の内に浮びたる蠟を汲とりて冷水中に投すれバ直に凝固す是即蜜蠟一名黄蠟なり後之を集めて再び溶し型に入れて固め賣品となす凡蜜脾より蠟をとる量ハ其全量の三分の一或ハ三分の一餘を得るなり

蟲巣より製する蠟ハ即水蠟樹に生ずる所の蟲巣にして白色恰も綿の如し之を採集し水煎して蠟を製す之を蟲白蠟といふ

西洋にてハ獸類の脂膏を以て蠟を製す又近年ハ地中より地蠟[OZOCERITE]と云ものを掘出し晒白して鮮美なる蠟を製することを發明せり此物ハ地瀝青の類にして至て澤山に產出すると云ふ

明治五年秋　武田昌次 述
山崎董淦 畫
明治九年春　武田昌次 再校



男爵田中美津男氏寄贈 先代田中芳男旧蔵書 昭和七年
B 65992
東京大学総合図書館